様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ５ 月 １８ 日現在

機関番号：１０１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2016
課題番号：２５３７０７５６

研究課題名（和文）中世日本の国際交流と文化の移入・翻訳・複合―和漢の政治文化論に向けて―

研究課題名（英文）Intercultural Exchanges between Medieval Japan and East Asia: Introduction, Translation, and Conjugation

研究代表者
橋本　雄（Hashimoto, Yu）

北海道大学・文学研究科・准教授

研究者番号：５０４１６５５９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,900,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究の課題は、室町期の日本がどのように東・東南アジアの異文化を摂取したかを究明することにある。対外関係史はもっぱら接触交流面に注目してきたが、そこで行き交う文物や思想がどこにどのように辿り着くのか、そこまで見通すことを目指している。というのも、ある外来の文物が日本に移入・翻訳され、既存の日本文化と融合していく様が分かれば、当時の価値観や世界観が却って浮き彫りとなるからである。
　具体的には、(1)貴金属の生産・贈与・流通、(2)禅宗の理念と足利家肖像との関係、(3)鉄炮伝来の契機や時期、(4)画僧雪舟の入明の史的評価など、様々な文化現象に着目し、もって政治社会史を豊かにするように努めてきた。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study is to investigate what and how Muromachi Japan took from the East and Southeast Asian cultures. Observing the conditions of absorption of those elements for fusing with traditional Japanese culture or rearranging the traditional Japanese culture into “Chinese” style, sense of values and view of the world at the time are rather highlighted.
International History between Japan and the foreign countries have paid attention to contact surfaces exclusively, but I foresee how the Japanese civilization and thought influenced by foreign cultures at the end.
I particularly tried to enrich the political, cultural history by investigating various cultural phenomena as below: (1) production, donation, and circulation of the noble metals; (2) relations with Zen Buddhism idea and portraits of some Ashikaga Shoguns; (3) the opportunity of the introduction of firearms to Japan; (4) historic evaluation of the Zen monk painter Sesshu’s travel to Ming China.

研究分野：中世日本国際交流史

キーワード：室町時代　唐物　禅宗　和漢　文化複合　政治文化論　外交　交流

１．研究開始当初の背景

一国史的視点の相対化が叫ばれて久しいが、何をどのように相対化するかは、それほど自明ではない。国境を越えて移動する人・物・情報の多さや豊かさを揚言するだけでは、中国・朝鮮・南蛮等の文化的影響を冷静かつ客観的に把握することは不可能だろう。問題は、外来文化移入の意味づけを、個別具体的に確定し、もって全体像を俯瞰することにある。

筆者はこれまで、唐物と外交とについて論究を重ね、東アジア的文脈（漢文脈）と日本国内的文脈（和文脈）とをいったん腑分けして考えねばならぬことを主張してきた（拙著『中華幻想』2011 年；同『偽りの外交使節』2012 年など）。そうした研究を進めていくなか、個々の唐物（舶来品･交易品）や外交儀礼、政治的・宗教的な文化表象（例、肖像や頂相、建築物・庭園など）に隠された「和漢」の文化的文脈が、いまだ十分に検知できていないという史学史上の問題に突き当たった。「漢」の文化の移入（再来･再現でも良い）においては、「和」文脈に浸っている摂取主体の取捨選択や選好がはたらいたのであり、昨日の「漢」が今日の「和」になってしまうこともしばしばであった。つまり、一見伝統的な「和」の文化と新渡旧来の「漢」のそれとの間には、相互の軋轢や融合、各々の輪郭や定義の揺らぎといった問題があって、よく言われるように、「伝統」も選択されて固着していく側面が強い。したがって、「和漢」の文化的複合性に注意を払わずに、室町時代の政治・外交や貿易・経済、宗教等を正確に捉えていくことは難しいと思われる。

こうした「和」と「漢」の文化的布置に関する問題については、美術史や文学が歴史学よりも先行している。しかし、そこに示された見事な見取図も、構造的・抽象的な理念型であるだけに、却って抜け落ちてしまう問題も少なくない。たとえば、ある中国文物を移入するにあたって、どこの誰が、いかなる取捨選択の態度で、意識的・無意識的に臨んでいたか、という問題は決定的に重要であるが、課題の大きさに比して個別研究は僅少であり、依然として大枠の議論に留まっている。

筆者の関わった例を引合いにすれば、足利義満以下の室町殿による政治外交的営為に関して、上記の如き「和漢」の問題関心はほとんど存在してこなかったと言って良い。義満が明使に高圧的態度を取っていたことすら、従来明らかではなかったのである（拙著『“日本国王”と勘合貿易』2013 年など）。室町殿の外交貿易・政治経済活動に籠められた政治文化的コード（約束事）を分析・検討する作業は、ようやく緒に就いたばかりだと言えよう。

また常識的に了解されるように、「唐物」が必然的に埋め込まれる外交や貿易の局面にあっては、通常の国内政治の場合よりも、とりわけ「和漢」の文脈のせめぎ合いが問題となってくる。本研究課題が、対外関係史を軸にしつつ、「和漢」の政治文化論を解明していこうと考えたのは、このためである。すなわち、当該期の文化の複合性や流動性に留意しつつ、中世の国際関係の実態や文化交流の国内的意味に関する考察を深めることを課題とした。その際、美術史･文学･仏教学など、隣接諸学の成果に学ぶことを怠らぬよう、重々配慮してきたつもりである。

２．研究の目的

すべての政治的営為には、何らかのメッセージが籠められると言ってよい。だが、くまなく分析することはもとより不可能である。そこで本研究では、筆者自身のかねてからの問題関心や研究実績、および次のような理由から、室町幕府・足利将軍家の政治や外交、貿易、唐物（舶来品）の取引などの局面に顕在化した政治文化論的メッセージの解明に注力する。なぜなら、室町幕府将軍家にとって、外交や貿易はつねに政治的関心事であり、禅宗を通じて中国文化に浴した武家は、唐風（漢風）文化を否応なく意識せざるを得なかったからである。そのためにも、禅宗を「我が宗」と言うほど手厚く保護した足利将軍家に関して、政治・外交・宗教政策を総合的に突き合わせて再検討していくことは不可欠である。その過程では、和漢の「伝統」が繰り返し参照・引用・創造され、それが大きな政治的効果を持っていたことが見通せるはずである。

さて、従来の中世史研究においては、「和」あるいは「漢」、国内あるいは海外、といった要素がそれぞれの立場からそれぞれに強調され、結論にも偏り／隔たりがあるように観ぜられる。とりわけ、中国・朝鮮等との関係を論じる対外関係史においては、海外とのつながりを過度に強調する傾向が強いように思う。もちろん、「アジアのなかの日本史」という視点の重要性は弁えているし、ナショナリズムに肩入れするつもりもない。だが、従来の研究が、アジアとの関係を実際以上に大きく描き、あまりにもアジア色豊かな歴史像を描きすぎてきた難点は指摘できるのではなかろうか。あるいは、ある歴史的な難問に対する解答を、比較的安易に対外的要因に求めてしまう、いわば対外関係史のブラックボックス化が進んでいるように感じるのは筆者だけであろうか。

如上の問題意識のもと、本研究がめざすのは、室町社会における「和」と「漢」の要素を偏頗なく等身大に剔抉し、もって中国とのつながりを無闇に強調する単純なアジア史的観点を相対化する、ということにある。当該期における「和漢」の文脈やコードをつぶさに解明し、それによって中世日本社会の特質を剔抉する。この点に、本研究の具体的目標を設定したい。

３．研究の方法

上記課題を遂行するために、中世日本社会を中心に、古今東西の故事や、和漢の書物・典籍等を適宜さらっていく必要がある。遺憾ながらその点でも未熟な筆者は、「２．研究の目的」にも述べたように、和漢文化論では歴史学が後塵を拝するばかりの、美術史や文学などの学問的成果に学ぶ必要を痛感している。そしてそのうえで、政治・外交などの室町期の個別具体的な事象に即して、検討を進めていきたい。

具体的には、外交儀礼の一環としてやりとりされる礼物・賜物には、いかなる政治文化論的含意が籠められていたのか、あるいは当時の人びとの政治的・経済的営為のなかには、どのような文化的・宗教的影響が看取されるのか、といった問題があげられよう。分析の素材としては、肖像画や伝説・神話などの言説、貴金属それぞれの性格に籠められた意味合い、技術伝播の契機論、などが想定される。

なお、こうした問題を究明して行くに際しては、「和」の伝統的価値体系はもちろん、中国・朝鮮・日本の仏典（とくに禅籍）や唐宋の漢詩文、朱子学（宋学）などを博捜し、分析を進めていく必要がある。とくに仏教的要素を探っていく際には、「和漢」の向こう側に潜む三国世界観――和・漢・梵――の奥行きにも目を向けることが必要不可欠であろう。

４．研究成果

初年度は、足利義満の政治外交姿勢と、和漢の伝統的世界との関係をめぐる研究を一定程度進め得た。そのほか、夏期に参加した「考古学と中世史研究」シンポジウムにて、金属をめぐる 15 世紀日本の国際交流史に関する研究報告を行なった。

前者の成果の一部については、筆者が責任編集を務めた『週刊朝日百科　新発見！日本の歴史』（足利義満が目指したもの）に開陳している（2013 年 11 月）。なかでも、足利義満の 1402 年明使接見儀礼の現場をイラストで復元したことは、大きな学問的チャレンジとして、個人的にも成果大であった。ご助言・作画をそれぞれ担当してくださった佐多芳彦氏・板垣真誠氏に深謝したい。

後者について、その規模や変遷を丁寧に辿ることにより、15 世紀日本における鉱産業の展開過程を推理することにも、ある程度成功したと思う。金属のなかでも、とくに金は、世俗権力や宗教的権威の象徴として重要であり、この点の解析は本研究課題と密接に関係する内容だと認識している。そして、特殊な朝貢目的の際の朝貢品として金が選ばれること、逆に中国からの回賜品として銅銭が注目されがちであったが、むしろ銀塊が特殊・重要な位置を占めていたことに気づけたのは僥倖であった。（次年度に論集『金属の中世』にて活字として公表）。

このほか、本研究課題とも密接に関わる 14-16 世紀日本対外関係史の通史的叙述を行ない、次年度に刊行された『岩波講座日本歴史』に発表した。

第 2 年度目には、足利義持の政治・外交姿勢と禅宗の言説・神話世界との関連性に関する検討を行なった。三井記念美術館で「東山御物の美」展覧会開催にあわせて、足利将軍家（義満・義持父子）の肖像画に関する雑誌論稿を依頼されたこともあずかっている（『聚美』13 号掲載論文）。検討の結果、義持が著賛した義満肖像画は、禅宗や密教をもって宗教界を統べてきた義満を称揚し、義満を毘婆尸仏（過去七佛の第 1）、あるいは釈迦如来（過去七佛の第 7）に准えるという言説を表現したものであることを突き止められた。宋元代および鎌倉南北朝期の禅籍類を調査し、またインド哲学・仏教学の成果（「仏陀の永劫回帰思想」）などを応用した成果であり、義持の宗教生活の一端に肉薄することができたと思う。

このほか、和漢の構図に関する議論とは一見やや離れるが、1540 年代の遣明船団と種子島、鉄炮伝来に関する再検討を行ない、台北・中央研究院での国際会議で発表し、また国内の査読つき雑誌（『九州史学』・『日本歴史』）で発表することができた。海外文物・技術の輸入・伝来に関するものであり、その正確な時期やルート、契機等を確認することは本研究課題ともまったく無縁ではない、と認識している。

第 3 年度から第 4 年度目にかけては、室町時代における和漢の転換や異同等を論ずるべく、雪舟等楊を主たる素材に研究を行なった。台湾（中華民国）中央研究院のプロジェクト「東亜的共相与殊相」（東アジアにおける文化意象の共通点・相違点）に関与することになり（校務の都合で今年度の当該シンポジウムには不参加で、論攷のみ提出）、美術史的検討の相対化が必要となった。和漢の異同や翻訳、変容を論ずるに当たって、雪舟およびその作品が最適な素材の一つであることは、否定すべくもなかろう。また、自身のこれまでの日明関係史研究を衍用することにより、過去の美術史研究とは異なる論点を提示しえたと自負する。具体的には、雪舟にまつわる文献史料を丁寧に読み直すことによって、従来よりも雪舟の禅僧的属性の強固さが明らかになった。一見、和漢の転換が絵画の領域で行なわれていたと考えられがちだが、実は「筆法＝仏法」の論理のもと、むしろ絵画表現の精神的な深層部分において、「和漢の間で変わらない」「和漢をまたいで共有される」ことが強調されていたのである（これは最終年度に東京大学美術史研究室紀要『美術史論叢』に論文として掲載）。

なお、第 3 年度目には、日明関係・勘合貿易に関する共編著の制作にも注力した（村井章介・橋本雄ほか編『日明関係史研究入門』

勉誠出版、2015 年)。かつて行なった科研費共同研究「前近代東アジアの外交と異文化接触」などを承け、多くの美術史家・考古学者にも呼びかけて編んだ、学際的研究の成果であり、現段階の研究の水準を明示できたと自負する。同書のなかでは、筆者はおもに通史や外交儀礼の箇所を担当し、「儀礼」をめぐる移入・翻訳・複合の諸相を分析・紹介するように努めた。もちろん、ここでも和漢の政治文化論が強く意識されている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　６件）

① 橋本 雄「雪舟入明再考」、『美術史論叢』33 号、査読無し、2017 年 3 月、pp.1-45。
② 橋本 雄「＜書評と紹介＞関周一著『中世の唐物と伝来技術』」、『日本歴史』819 号、査読無し、2016 年 8 月、pp.100-102。
③ 橋本 雄「「鉄炮伝来」と禰寝侵攻一件」、『日本歴史』818 号、査読有り、2016 年 7 月、pp.69-77。
④ 橋本 雄「天文・弘治年間の遣明船と種子島」、『九州史学』171 号、査読無し、2015 年 10 月、pp.22-51。
⑤ 橋本 雄「倭寇とは何か」、『歴史地理教育』830 号、査読無し、2015 年 2 月、pp.20-17。
⑥ 橋本 雄「足利将軍家の肖像の語るもの」、『聚美』13 号、査読無し、2014 年 10 月、pp.44-48。

〔学会発表〕（計　６件）

① 橋本　雄「雪舟入明再考」、東京大学東洋文化研究所主催「東洋学研究情報センターセミナー：雪舟入明再考」、東京大学東洋文化研究所（文京区）、20160908。
② Hashimoto, Yu（橋本 雄）, “Were the State Letters Authentic?” Association for Asian Studies, ワシントン州コンベンションセンター（米国シアトル）、2016-03-31。
③ 橋本 雄「請来大蔵経と室町幕府・京都五山」、上野記念財団主催：平成 27 年度：研究発表と座談会、京都国立博物館（京都市）、2015-08-30。
④ 橋本 雄「近世日本海禁論の前提を問う」、京都大学人文科学研究所・共同研究班「東アジア近世の地域をつなぐ関係と媒介者」（岩井茂樹教授代表）、京都大学人文科学研究所（京都市）、2015-03-09 – 03-11。
⑤ 橋本 雄「応仁度遣明船と雪舟入明再考」、同上。
⑥ 橋本 雄「1540 年代、大友氏遣明船と種子島・鉄炮伝来」、国際シンポジウム大航海時代的台湾与東亜（中華民国・清華大学・中央研究院ほか主催）、中央研究院（台北）、2014-07-14 – 07-15。
⑦ 橋本 雄「中世日本と東アジアをめぐる金属流通」、考古学と中世史研究会、帝京大学文化財研究所（山梨県笛吹市）、20130706－0707。

〔図書〕（計　５件）

① 村井章介・橋本 雄ほか編『日明関係史研究入門――アジアのなかの遣明船』勉誠出版、2015 年、568p.（総説Ⅰ・第 6 部総論・各項目・あとがきなど担当）
② 大津 透・桜井英治ほか編『岩波講座日本歴史８　中世３』岩波書店、2014 年、314p.（※橋本 雄「東アジア世界の変動と日本」pp.39-76）
③ 小野正敏・五味文彦ほか編『金属の中世』（考古学と中世史研究 11）、高志書院、2014 年、260p.（※橋本 雄：「中世日本と東アジアの金銀銅」pp.121-155）
④ 細田典明編『旅と交流』（北大文学研究科ライブラリ）、北海道大学出版会、2014 年、258p.（※橋本 雄：第 6 章「八重山に漂流した朝鮮人たち」pp.153-204）
⑤ 橋本 雄編著『足利義満が目指したもの』（週刊朝日百科 新発見！ 日本の歴史 23：室町時代 2）、2013 年、38p.

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）
　　――なし

○取得状況（計　　件）
　　――なし

〔その他〕

ホームページ等
・個人業績集
　https://www.hi.u-tokyo.ac.jp/personal/fujiwara/bib.hashimoto.html
・勤務先個人紹介
　https://www.let.hokudai.ac.jp/staff/2-1-05/

６．研究組織

(1)研究代表者
橋本　雄（HASHIMOTO, Yu）
北海道大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：５０４１６５５９

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし

(4)研究協力者
なし